



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752

私が出会ったロシア人の習性・行動パターン

島山 堅蔵

ロシア人は“浪花節”を理解し、深く付き合えば日本人との理解は進むと感じています。

しかし、そこまで関係を深堀するためには、ロシア人が持つ独特の感性を理解する必要があります。そのような感性を知識として事前に身に付けて頂ければと思い、私の経験から学んだ“ロシア人の習性・行動パターン”を紹介します。まずは“実話”からです。

●“風”の責任？

モスクワに単身赴任時代アパートに戻ると、台所にあったコーヒーポットが割れていた。留守中に不審者が侵入したかもしれないと心配になり、その日部屋の掃除に来てくれた老婦人に電話した。“家のコーヒーポットが割れているが知っていますか？”と質問すると、彼女は「今日、日中暑かったので窓を開けた。その時、風が台所の中に吹いて来て、コーヒーポットが倒れて割れた。風がコーヒーポットを割った。私は窓を開けただけで悪くない（Я не виновата.）」と返答した。日本人では“考えつかないロジックであったが”、肝心な不審者は侵入していないことが分かったので、彼女の行為は不問とした。

●Negative Informationを先に入手することが重要。

ロシアのアネクドット（小話）から。

「ある日ロシア人の部下が上司のところに来て、“今日は良い情報と悪い情報を持っていますが、どちらから説明しますか？”と尋ねたので、上司は“良い情報から始めてくれ。”と言いました。部下は“この度漸くA社から契約が取れました。”と言い上司は“凄いいじゃないか！それで悪い情報は？”部下曰く“その契約がキャンセルとなりました。”」

ロシア人は外面からなかなか気づかせませんが、上司との関係をかなり気にしており、そのため、通常は“良い情報しか報告・説明しない傾向があります。”このため、実際問題が起きているのに、対応が遅れることが多いので、ロシア人からは最初に悪い情報から掴むように

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

野口久美子氏、故坂本斐子氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org

Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752

することが重要です。

●ほうれんそう（報・連・相）の重要性

上記とも関連しますが、ロシア人は“状況が変化しない状態は報告に値しない。”と考える傾向があります。しかし、日本人は“状況が変化していないことを確認したことはりっぱな情報と評価する”ので、必ず報告することを理解させることが重要。

●ロシア人のロジック

ロシアの工場を訪問し、状況を説明してもらうと、すぐバラ色な将来を語ります。ロシア人の説明には冒頭に“I hope that (Я надеюсь на что)”

(～ことを自分は期待する。) が省略されているケースが多々あります。事実に基づいた話と理解すると、判断を誤ります。

●モスクワ事務所の所長時代、本社からの幹部訪問を受けた際、毎回訊かれる質問に“ロシアはどういう国なのか？”がありました。いろいろ考えた末、“いいかげん（無責任の意味）といい・かげん（いい加減：適度の意味）の国。”と答えるようにしました。実際ロシアでは、決め事・規則が恣意的に解釈されたり、係官によって運用が異なったり、“いいかげん”なことが目につきますが、他方で、この国の秩序を守るためシステムはきちんと制御されており、“いい・かげん”が働いていることを感じます。

次回は“ロシア連邦とソ連邦の違い”につき述べたいと思います。(事務局長)

お知らせ

●NPO日口交流協会第22回（通算第58回）通常総会

日時: 2022年3月26日（土）10:30～11:30

場所: 新橋生涯学習センター305号室

*会員の皆様にはご案内をお送りいたしますので、3月15日までに必ずご返信くださいよう、お願い申し上げます。

*ご出席の方は、当日、検温とマスクの着用をお願いいたします。

●ロシア語クラス生徒募集！

水曜 初級1A-1 (19:00～20:00) 初級1A-2 (20:05～21:05) 土曜 上級 (10:00～11:30)

オンラインクラスは月曜 準中級 (18:00～19:00)、日曜 ゼロからクラス (18:00～19:00)

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮はしておりますが、受講の皆様はマスクの着用、換気、手洗い等、感染の予防にご協力お願いいたします。(緊急事態宣言の際は原則オンラインとなります。)

*協会事務局までお問い合わせください。

E-Mail: nichiro@nichiro.org Tel: 03-5563-0626



「ロシア民謡を楽しむ会」再開に向けて

田中 徹

40年ほど前に当協会の文化交流活動として、わずか数名で創設された「ロシアの歌と踊りの会」は、その後大使館付属のロシア人学校の先生を指導者に、更に通商代表部の方も加わりバヤン（アコーディオン）演奏を交えた8名の合唱団となりました。2001年には「ロシア民謡を楽しむ会」と名称を変えて今日まで活動を続けています。その間、社会活動として板橋区や豊島区の介護施設を訪問し、演奏の最後に「カチューシャ」で締めると皆様も良く知っていて大変喜ばれました。

2019年6月より「若き巨匠」として名高いミハイル・カンディンスキー先生を指導者に迎え、更にレパートリーを増やしています。同年10月に開催された「麻布区民センターふれあいまつり」（写真）は、あいにくカンディンスキー先生の「ショパン国際コンクールアジア予選」の審査出張と重なりましたが、愛弟子の吉田カレン先生に代役をお願いして「輝け、輝け私の星よ」「赤いサラファン」「夕べの鐘」「サラ



ヴィイー＝うぐいす」の4曲を発表。特に4部合唱のサラヴィイーは5分を超える難しい曲でしたが、各パートのハーモニーが良かったと大変好評でした。

国内にはロシア民謡を歌うプロ・アマ数多くの合唱団がありますが「ロシア語のみ」で40年近く歌い続ける数少ない合唱団と自負しています。2020～21年

はコロナ禍によりふれあいまつりも中止となり、わが会も休会を余儀なくされていますが、今年こそはと再開を望む会員の声も多くあり会場の確保に努めています。現在も4名の方が入会を希望していて待機中です。

わが会は「老いて学ぶを忘れず」「向上心にあふれる」楽しむ会であり続けたいと願っています。今春の再開については、感染状況を見ながら決める事にしており再開の場合には“Russian TEA”でお知らせします。皆様のご支援を宜しくお願い致します。（ロシア民謡を楽しむ会・会長）

追悼



坂本斐子さんを偲ぶ

千葉麻里

2022年1月24日、坂本常任理事が100歳で亡くなられた。一昨年には事務所で白寿を、昨年11月には、大使館や通商代表部で山岸先生の生け花クラスの後には100歳のお祝いをした矢先のことだった。その際、通商代表部からは永年の実績に対して感謝状が授与された。今年の1月の常任理事会にも出席するために田町まで出向いて来られ、役員たちに元氣な姿を見せてくれた。

私が初めて坂本さんにお会いしたのは44年前、世界青少年交流協会の代表団に参加して旧ソ連を訪問した時のこと。坂本さんは「日ソ友の会」を通じて招待されていて、ブラトークを肩にした姿が印象的だった。ロシア語も全くわからない私に、「あなたは、ロシアのことを始めるようになるわよ」と予言し、その言葉通り、その後、日ソ交流協会（当時）に入会して共に活動することとなった。

その後、間もなく私は両親を亡くし、何か迷ったり悩んだりしたとき、坂本さんはいついかなるときでも真剣に相談に乗ってくれた。これは、言うまでもなく私だけが経験したことではない。国内の友人知人だけでなく、ロシアをはじめとする海外の多くの人が、坂本さんを姉や母や祖母のように思っていることだろう。

何をおいても真っ先に駆けつけて、文字通り全身全霊で他人のために東奔西走する。そういう人だった。回りの人の声に耳を傾け、一緒に泣いたり笑ったり、安心させたり楽しませてくれたり。24時間人に尽くすことで、大正から令和までの100年をひたすら走り続けた。ご主人が亡くなられてからは強靱な精神でずっと一人暮らしを通し、そして、誰の手も煩わせることなく、あっけなく逝ってしまった。

生涯を日ロの友好と平和に、周囲の人の幸せに身を捧げ

た。今は、ただご主人の隣でゆっくり羽を休めてください。

私は思う。いつまでも悲しんでいてはいけないのだ。坂本さんと過ごした珠玉の日々を思い起こしながら、少しでも前に進まなければ。坂本さんがそう願いながら、私たちを見守っているに違いないのだから。

坂本さんと親しかった姪御さんの郡司喜代子様と青山百合子様に、ガルージン在日ロシア連邦特命全権大使、パブレニコロシア連邦通商代表から弔電が、大使館の生け花クラスから弔電とお線香が、通商代表部の生け花クラスから香典が届きました。また、前駐日ロシア大使アフアナシェフご夫妻、元駐日ロシア大使パノフご夫妻、同じくペーリイご夫妻からも弔電が届きましたので、掲載させていただきます。

「坂本斐子様のご逝去の報に接し、謹んでお悔やみ申し上げます。今は生前の笑顔ばかりが思い出され、悲しみに暮れております。

ロシアを、そしてロシア人を心から愛された坂本様は、私たちの真の友人でした。日本とロシア両国の文化に造詣が深く、大使館でのコンサートなどのイベントにもいつも積極的にご参加くださいました。

露日文化交流、両国民の相互理解の強化に最善を尽くされ、民間外交のあるべき姿を示された坂本様に衷心より敬意を表するとともに深く感謝申し上げます。

坂本様についての温かい思い出は、いつまでも私たちの心に残ります。

ご冥福をお祈り申し上げます。」

合掌

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

これまで10回ウズベキスタンを訪問した中で、最も興味深かった伝統行事は「ナウルズ」です。タジク語で「新しい日」という意味で、中央アジアの主な国々、タジキスタンやウズベキスタンなどで3月にとり行われる新春を祝う行事を言います。

2002年3月下旬に訪問した際、NORIKO学級のガニシエル校長がフェルガナ市のTV局に案内してくれました。敷地内の向こうの方で、何やら湯気があがっていました。近づいてみると、湯気が立つ直径1mほどの大鍋の前で、女性達が長いひしゃくで何かをかき回していました。(写真ご参照) それを見た瞬間、おとぎ話に登場する大鍋をかき回す魔法使いの姿がオーバーラップし、ファンタジーの世界に引き込まれていきました。彼女達は「スマラク」という小麦の芽を24時間煮詰めて作る、日本の「麦こがし」の味に似た甘いジャムのような食べ物を作っている最中でした。

日本人に、春のお彼岸に「ぼた餅」を食べる風習があるように、ウズベク人には、ナウルズにスマラクは欠かせません。小麦の栽培を担うのは、大家族の中の年長者「おばあちゃん」です。秋に小麦の種を蒔くことから始まり、調理法を、祖母から娘、娘から女の子の孫へと受け継がれていくため、おのずとスマラク作りは女性達の役割になったとのこと。男性は水運びなどを手伝います。

今回の寄稿にあたり、NORIKO学級出身のジョエバ・ショヒジャホンさん(一期生)とウリモンジノワ・マディナさん(留学生)



にご協力いただきました。彼女達は異口同音に「ナウルズは、子ども時代の楽しい思い出」と言っています。私がナウルズを体験した2002年頃が、最も盛んだったでしょうが大量の水と高価な薪が必要なスマラク作りは年々縮小傾向にあり、コロナ禍で、大勢が集まれなくなったことも拍車をかけ、各家庭での調理やスーパーマーケットで販売され始めた瓶詰めスマラクの購入へと、徐々にシフトしているようです。

スマラク全盛期には、親戚一同、同級生、職場関係者などがスマラク作りの家と日にちを決めて集まり、スマラクが出来上がる翌朝まで、ダンスや歌を歌って過ごすのが恒例でした。当時、子どもだったショヒジャホンさんは「新しい服と靴でおしゃれができたことが嬉しかった」と言い、マディナさんは「8年も食べていない」と、味を懐かしんでいます。

実は、大鍋の底にはスマラクが焦げ付かないよう小石が数十個、入れてあります。ひしゃくですくい上げた小石の個数が、将来の子どもの数になるという占い遊びを私も体験しましたが、ドロリとしたスマラクの中から小石をすくい上げるのは至難の業でした。子ども時代に3,4個すくい上げたショヒジャホンさんが、3人のお子さんのママになったのは、嬉しいファンタジーですね。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)

函館の二代目ソ連領事キセリョフ

倉田 有佳

(1月号の続き)「通訳キセリョフ」として函館に上陸した「若宮丸」漂流民善六が去って1世紀余後、ドミトリ・キセリョフが、二代目の在函館ソ連領事として着任した(1928年7月)。

来函前から領事は、日本人そっくりな美しい妹がいると語っていたが、来函後は、「函館の人であった日本人の曾祖父」は、「安政年間の頃函館に住んでいた千石積の船頭某」で、暴風雨で難破した船が漂流した後、「ロシアの一漁村に辿りつき、九死に一生を得た」。「日本へは帰らずキセリョフ家の婿入りをして三人の子供を儲け(ママ)、ロシア人として一生を暮らした。それから四代目の当主がキ領事である」、などと函館との縁が強調された。

エカテリーナ夫人の病気もあってか、函館での勤務は2年に満たなかったが、領事館のガリーナ通訳を伴って図書館を訪れ、古い資料を探し、曾祖父の子孫を見つけようとした。だが、「函館に住んでいた千石積みの船頭某」、という不正確な情報が邪魔してか、祖先の縁は見出せなかった。

現在では、善六に洗礼を施した代父がイルクーツクの富裕な商人ステパン・フョードロヴィチ・キセリョフであること、そして善六とキセリョフ領事との間には血縁関係がないこと(領事はキセリョフ家の養子)が明らかにされている。だが、函館との縁や高田屋嘉兵衛を連想させる出自は、石巻出身の善六自



和服姿のキセリョフ領事(『函館日日新聞』1929年2月11日)

身が子孫に伝えたことなのか、それともキセリョフ領事の作為だったのか。疑問は残る。

ちなみに、新任領事キセリョフが青森からの連絡船で函館港に到着し、出迎えの市代表らを前にして最初に触れたのは、函館港が良港で、ソ連との取引上重要な地点で、120年前の高田屋嘉兵衛の頃から重要な関係にあるといった点だった。北洋漁業の基地として毎春多数の漁業労働者をカムチャツカに送り出し、市内のロシア語通訳はゆうに100人を超える街・函館のことをソ連側も重視していたのである。

1930年5月、函館勤務を終えた領事は、夫人と共に本国に帰国した。敦賀からウラジオストク行き船に乗る直前、「在外十年の生活中日本に於ける生活」が、「恐らく生涯を通じて最も光輝あり印象深いもの」だ、と領事は語っている。敦賀での約3年は、領事館の開設場所をめぐる雑務に追われ、館員間の関係はぎくしゃくしていた。一方函館では、日本びいきのため「下駄領事」と謳われ、私生活では、子供たちを呼び寄せて家族水入らずの楽しい夏も過ごした。キセリョフ領事にしても、「曾祖父ゆかりの地」は、特別な場所として記憶されたことだろう。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)

<参考>・鈴置善郎「敦賀のロシア・ソヴィエト連邦領事館について」日本海地誌調査研究会『会誌』第12号(2014年)。

・寺山恭輔「日本人漂流民の子孫と名乗るソ連外交官キセリョフ」『窓』126号(2003年)。

・『函館日日新聞』1928年7月14日; 1928年8月18日; 1929年2月11日。

こんにちは、アニメ

岩井 遥香

こんにちは。上智大学ロシア語学科3年の岩井遥香です。私が参加していたオンラインアニメイベント「J-anime meeting in Russia 2021」が大盛況のうちに幕を閉じたことをここに報告させていただきます。

本イベントは日本映像翻訳アカデミー主催のもと、2021年11月27日と28日の2日間にかけてオンライン上で開催され、総勢約70名の日露の学生が一から企画・運営に携わりました。イベント総参加者は約800名で多くの方からご参加頂きました。協賛金は総額80万円、クラウドファンディングでは43万5017円のご支援を頂きました。ご支援くださった皆さまに改めて感謝申し上げます。

本イベントではロシア向けのオンラインプラットフォームにて、学生が字幕翻訳を施したアニメ映画「君の膵臓をたべたい」と「AKIRA」を上映いたしました。この他に、日露の様々な豪華ゲストが出演するトークショーやパネルディスカッションを通して、日本のアニメに息づく奥深い文化コンテクストを楽しんでもらうことができました。

このプロジェクトのミッションは、(1)アニメを通してロシアの方々に日本の文化資産としてのアニメアーカイブに火をつけること、(2)高度なグローバル人材を育成すること、(3)日露の市民レベルでの文化交流を活発化させることでした。

私たちはこれまでの活動を通して、これらミッションを前進させることができましたと考えます。(1)においては、何度も勉強会

と推敲を重ねて完成させた字幕翻訳によって、素晴らしい日本のアニメをロシアに伝えることができました。PRチームやSALESチームの懸命な告知・協賛活動の甲斐もあり、アニメや日本文化にもともと関心があったロシア人だけでなく、興味がなかった方からもご視聴頂き、多くの称賛の声を頂きました。

(2)においては、コロナ禍においても世界と繋がり続ける姿勢を持った日露学生が各チームに分かれて、イベントの企画を約半年進めてきました。例えば、私は主にイベントの資金調達、SNSを使用した宣伝活動を行ってきました。建設的な議論を通し、チームで共通の目標に向かって尽力することの意義を学びました。また、PR活動を通して日露の文化に一層の興味を抱いたと同時に、発信していく立場を担っていきたいと感じるようになりました。今後の社会人人生を迎えるにあたって貴重な経験でした。

(3)においては、私自身、このイベントを通して知り合ったロシア人の友人と会う機会があり、お互いの言語で、お互いの文化を語り合うことを楽しんだ経験があります。ロシアで日本のアニメがどれほど人気かという熱のこもった彼女の話がとても印象的でした。

現在新型コロナウイルスに加えて国際情勢が緊迫化している中ですが、明るい未来のため、一層の日露文化交流促進活動が続け、架け橋となる立場を担っていききたいと思います。

ワルツ王ヨハン・シュトラウスとロシア (1)

畔上 明

元日の晩、ウィーン楽友協会から生中継されるニュー・イヤー・コンサートを年明けの楽しみとされていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。ワルツの父ヨハン・シュトラウス(1804-1849)の「ラデツキー行進曲」、さらにその長男ワルツ王ヨハン・シュトラウス2世(1825-1899)の代表作「美しく青きドナウ」でフィナーレを飾ることが恒例のコンサートです。

サンクト・ペテルブルク中心部から南に30km、パーヴロフスク宮殿の庭園に沿ったサドーヴァヤ通りをパーヴロフスク駅から南東に2km ばかり進んだヴェリーニツカヤ通りと分岐する一角に、このワルツ王の銅像が建っているのをご存知でしょうか。

銅像は、ウィーンの手立公園に大理石のレリーフに囲まれて金色に輝く記念像と同じ形の、ヴァイオリンを弾くヨハン・シュトラウスの姿で、サンクト・ペテルブルク建都300年を祝う2003年にオーストリア政府より贈られました。

作家ドストエフスキーやレフ・トルストイと同時代人であるヨハン・シュトラウス2世は、ウィーンに生まれウィーンで亡くなりましたがロシアとの縁は浅からぬものがあります。中欧の大帝国であったハプスブルク王朝の中心都市ウィーンには、父シュトラウスが活躍していた頃から少数派のスラヴ人社会が存在し、そこでは様々な芸人達が組織され音楽集団も形成されていました。息子のシュトラウスは若き頃そうしたスラヴ人たちと接触し交流を持ち、その関心の成果が「スラヴの寄せ集めOp. 39」(1847)という民族色豊かな24のメ



パーヴロフスクのヨハン・シュトラウス像

ロディーとして残されています。ヨハン・シュトラウスの曲の中には美しく楽しいメロディーだけではなく、甘くメランコリックなトーンが漂い、そこにスラヴからの感化を指摘することが出来るかもしれません。1847年秋のバルカン旅行、さらに1848年3月の革命騒ぎで民族自決の気運が高まると益々シュトラウスにはスラヴに対する興味が増していったのですが、12月に入ってオーストリア皇帝フェルディナンド1世が退位し18歳のフランツ・ヨーゼフが即位した直後のコンサートに於いて「スラヴの寄せ集め」を演奏したところ、聴衆からは「ドイツ的な曲」を演奏しろと猛烈な抗議がありました。

その時ヨハン・シュトラウスが受けた心の傷は大きく、フランツ・ヨーゼフ皇帝がロシアのニコライ1世との間に協力関係が生まれると、自身の音楽経歴のダメージを挽回する機会とばかりに「ロシアの主題によるニコライのカドリール Op. 65」作曲してニコライ皇帝に捧げます。この曲は、ニコライの息子で当時のロシアの皇太子、後のアレクサンドル2世が1849年8月19日から22日までの間、フランツ・ヨーゼフの夏の離宮であるシェンブルン宮殿に滞在していた時に贈られたものです。

さらに、ニコライ皇帝の妃アレクサンドラが1850年にワルシャワでヨハン・シュトラウスと会うこととなり、その将来性に期待しダイヤモンドを贈呈、シュトラウスは返礼として「ワルシャワ・ポルカ Op. 84」を捧げます。アレクサンドラ皇紀は、このときシュトラウスをロシアに招待することを伝えたと言われています。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)